

新町川・阿波製紙水際公園における行動実態把握

徳島大学大学院 学生会員 ○田中 紀年

徳島大学大学院 正会員 尾野 薫

徳島大学大学院 正会員 山中英生

1. 研究の背景及び目的

近年の河川流域における生産活動の拡大や都市化の進展等に伴い、水辺環境が著しく変化し、親水性や水辺景観の低下、利水障害等の問題が生じてきた。今現在、この問題の解決策として多くの親水公園が誕生し、形態も様々になってきている。そんな中、徳島市内には河川が多く、日常的に河川空間を利用する人の姿をよく目にすることがある。また、新町川と助任川で囲まれた地域は「ひょうたん島」と呼ばれており、その周辺には多くの公園も存在している。しかし、その利用実態を調査したものは多くない。以上より本研究では、親水公園を対象に公園としての行動実態調査を行い、人の行動と空間特性との関係性を考察し、記述することを目的とする。

2. 既往研究の整理及び本研究の位置付け

河川空間において人の行動と空間とを関連付けた研究はあるが、諸々の活動の全体的な特徴を把握するには至っておらず、人と空間以外に他者の影響を考慮した研究は少ない¹⁾。本研究では、ビデオ撮影により公園の行動観察調査を行い、空間的・社会的距離の観点から人の行動と空間特性と他者の影響を考慮することで、新規性を持たす。

3. 調査概要

3.1 対象地について 新町川は中心市街地を貫流する河川であるため、まちの象徴として早くからまちづくりの中に組み込まれており、滞留・通過の利用が多く見ることができる。新町川・阿波製紙水際公園は、1989年(平成元年)に開設された新町川沿いにある公園で面積は7,200m²。(図1)

3.2 調査概要 新町川・阿波製紙水際公園における人の行動の実態を把握するため、

ビデオ観察調査による行動内容と動線の観察調査、及びその展開された空間の特性の調査を行う。調査日は2018年11月12月の休日、平日それぞれ2日ずつで、調査は6:30~7:30、12:00~13:00、17:00~18:00の1日3回、合計3時間行った。

3.2.1 調査方法 撮影対象範囲を4つに分けにビデオカメラを設置し、当該公園を訪問・利用する人について映像を記録する。記録内容については、下記項目である。基礎情報(属性、年齢、訪問人数)、移動方向、来訪手段、滞留時間、行動内容(休憩、昼食、散歩 など)である。

3.2.2 分析方法 撮影した映像をもとに、Ⅰ滞留行動と空間特性の関係性Ⅱ利用者が互いに影響し合っているか、つまり相互作用Ⅲ相互作用と空間特性の関係性を詳しく観察する。その際に右の平面図(図2)を用いて分析を行う。



図1 調査対象地 全体図

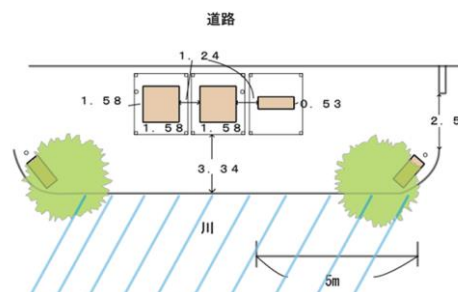


図2 地点1 平面図

4. 調査結果と分析

4.1 行動観察調査結果 調査日4日間における総利用者数は1,194人であった。平日の方が利用が多く、また、

時間帯別に比較すると、昼の時間帯が1番利用者が多いことが分かった。各日においても通過での利用が大半であることも分かる。(図3)

4.2 新町川・阿波製紙水際公園における行動特性 すべての時間帯において通過者の割合が7～8割近くあり、通過としての機能が高い公園だと言える。男女の割合は男性が概ね6割と多いことが分かる。年齢層に関しては、各日においても中年期の利用が多かった。グループ人数においては、各日とも6～8割が1人での利用で大半を占めた。最後に移動手段については、7～8割が歩きであった。次に2～3割が自転車であった。

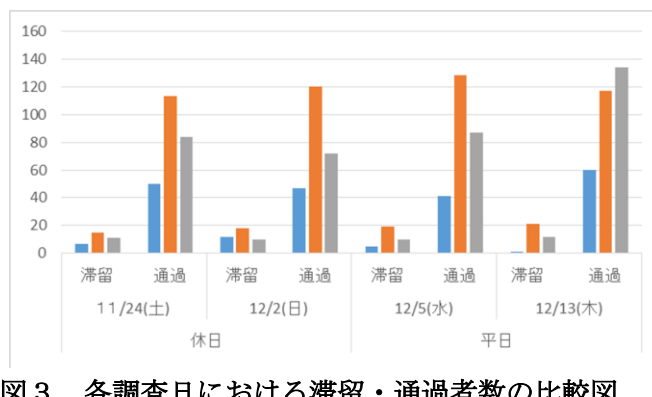


図3 各調査日における滞留・通過者数の比較図

4.3 滞留行動と空間特性の関係分析

4.3.1 滞留密度 地点別・時間別に滞留密度を調べると地点別では地点2で、時間別にみると昼での滞留が多いことが分かった滞留密度はのべ滞留時間を総観察時間で割ったものと定義する。

4.3.2 滞留行動と空間特性の関係性 地点1には1.58m×1.58mの正方形ベンチが1.24mの間隔で設置されており、その横にまた1.24mの間隔に1.58m×0.53mの長方形ベンチがある。観察例1として、2つの正方形ベンチに子供同士が向かい合って話をする行動が観察できた。これはベンチ間の距離が1.24mで、向かい合っても友達同士、同じ空間にいると感じられる距離感であると考えられる。この行動は他の地点では見られなかった。以上からこの地点は、同グループの複数人での滞留が可能で、同じ空間にいると感じられる空間特性であると考えられる。

4.4 相互作用 昼の時間帯において人と人との影響について観察すると、全部で13件の相互作用が確認でき、それらを5つのパターンに分類することができた。(図4)

相互作用パターン

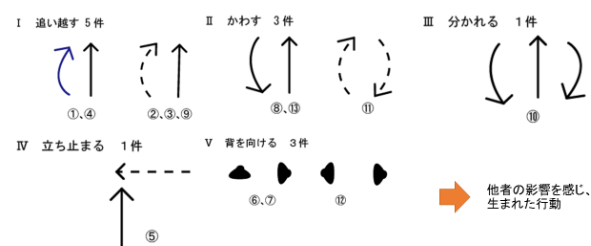


図4 相互作用概念図と件数

5. 新町川・阿波製紙水際公園における行動実態

5.1 相互作用と空間特性の関係性 確認された5パターンのうち、とくに件数の多かった、追い越す、かわす、背を向けるについて検討する。(図5) 追い越すという相互作用では0.5m以上の間隔が必要であることが分かり、その要因として道幅が狭く、閉ざされた空間であるということが分かった。かわすでは、0.75m以上の間隔が必要で追い越す場合より間隔が必要であることが分かった。要因として他者の行動が予測しづらい空間であることが考えられる。背を向けるではどれも社会距離遠方相の距離を保っており、多方向から座れるベンチが要因と考えられる。

6. 結論

6.1 本研究の成果 東屋は単に休憩スペースとしての機能

ではなく、個人の領域として、他者の影響を感じさせない空間である、ベンチはその形状や配置から多様な行動が生まれる可能性がある空間特性である、ということが明らかになった。

6.2 今後の課題 通年の調査を行い、季節の違いによって人の動きのパターンを把握することが必要である。

7 参考文献 1) 山口 勝、北村真一：川における活動と空間の関係性の分析、土木計画学研究・論文集、No6、pp. 113-120、1998

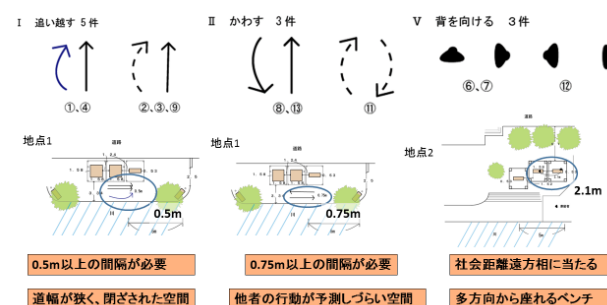


図5 相互作用例